

# 和白干潟の水鳥

和白干潟は日本海側では我が国最大規模級の干潟です。春と秋はシギ・チドリ類の渡りの中継地となり、冬期はカモ類をはじめカモメ類・カイツブリ類など多数の水鳥の越冬地となっています。

シギ類ではオオソリハシシギ、チュウシャクシギ、一部に磯海岸があることから春にはキョウジョシギが訪れ、ダイシャクシギ、ハマシギ、ミユビシギなどが越冬します。なかでも二枚貝を食べるミヤコドリが毎年渡来する全国でも数少ない場所です。

干潟とその周辺部には淡水ガモと呼ばれるマガモ、ヒドリガモ、オナガガモなど、そして美しいツクシガモも見られます。また、干潟に続く浅海域には海ガモ類のスズガモ、ホシハジロの1万羽を越える大群や愛らしいホオジロガモが潜水して餌を採る光景や、カモの群れの中に眠るカンムリカイツブリが見られていましたが、沖の人工島工事着工以来、激減しています。

カモメ類ではウミネコや福岡市の鳥・ユリカモメなど、また少数ながらズグロカモメも飛来し、さらに、サギ類の珍客カラシラサギが現れることもあります。

日本列島沿いの南北と、中国・朝鮮半島からの東西の渡りルートの交差点にあたる博多湾・和白干潟は、レッドリストで絶滅が心配されるクロツラヘラサギやコアジサシ、ホウロクシギなど、貴重な水鳥も多数飛来しています。



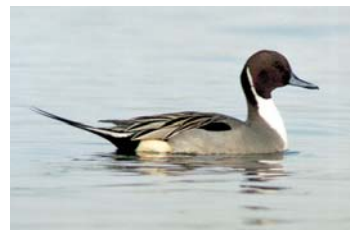
ミヤコドリ



ホウロクシギ



クロツラヘラサギ



オナガガモ



ズグロカモメ



ハマシギ・ミユビシギ



# 和白干潟の底生動物

干潟の表面や内部に生息する動物を底生動物と言います。ゴカイ類、貝類、甲殻類が代表選手です。和白干潟は大部分が砂質干潟ですが、河口域には泥湿地もあり、またアシ原などの後背地もあるため、多種多様な底生動物が生息しています。

シロチドリが泥の中からゴカイを引っ張り出すのを見たことはありませんか。ゴカイ類は普段目にするのが少ない動物ですが、シギ・チドリ類や魚類の餌になっています。

干潟の上に無数に転がっている巻貝はウミナナの仲間です。他に、アサリやオオノガイなどの二枚貝も多く見られます。エビ・カニ・ヤドカリなどを甲殻類と言います。浅瀬を歩くとクルマエビが跳ねるかもしれません。

夏の干潟に降りてみると、コメツキガニやハクセンシオマネキ・チゴガニなどが巣穴より出てしきりに求愛のダンスをしているのを見ることができそうです。アシ原には希少種のオカミミガイもいます。

これらの底生動物はそれぞれが干潟の多様な環境に適応して生活しています。そのため人間が手を加えて環境が単純化されると、わずかの種しか生息できなくなるでしょう。干潟の環境を多様なまま守っていくことが大切です。



コメツキガニ



ホソウミナ



ゴカイ(アオサの上)



二枚貝 (オオノガイ・ソトオリガイ・アサリ・オキシジミ)

# 和白干潟沿岸の植物

ハマニンニクはテンキグサとも呼ばれています。テンキグサはアイヌ語が語源とされるように、北方の植物です。九州では、福岡県西岸だけに生育していることになっていますが、現実に生き残っているのは、和白海岸だけです。ヒトモトスキもウラギクも本当に少なくなりました。

海水と淡水の入れ混じるあたりで、幾らか泥っぽいという限られた環境が、次々とつぶされてしまいました。和白海岸は好塩性植物の生きる最後の砦とも言えそうです。



ハマニンニク(穂)



ヒトモトスキ(穂)



アシ(ヨシ)



ウラギク(ハマシオン)